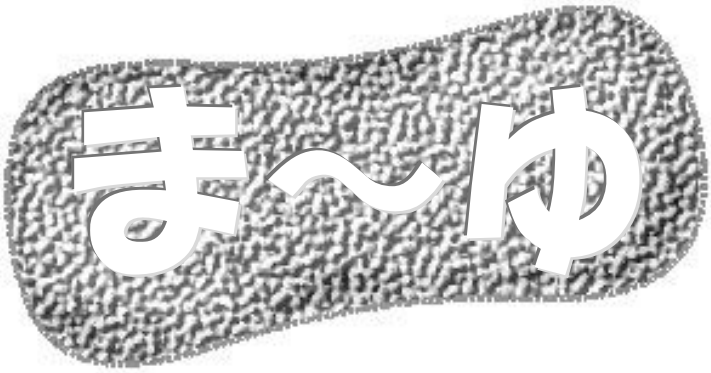
上田地域もの・こと交換制度
蚕都くらぶ



蚕都くらぶ・ま～ゆ会報

No. 30

2006 年7月 15 日 発行

わたしたちの願い

蚕都くらぶ・ま～ゆという上田地域通貨モノコト交換制度は、地域で暮らすひとびとがお互いに助け合って楽しく暮らすための制度です。

私たちは、この地域の豊かな自然やひとびとの知恵・技術・経験・人柄を地域の宝と考えます。その宝を活用することで、より豊かな地域と人間関係を目指しています。

蚕都くらぶ・ま～ゆは、地域通貨を使って人と地域をつなぐシステムです。

- ❖ 人と人との新しい関係が生まれます。
- ❖ 自分の能力を再発見できます。
- ❖ 人が活き活きすることで、地域が元気になります。

アタマと舌と足腰を鍛える！ま～ゆ3トク自然教室

第２回ま～ゆ寺子屋は新緑の菅平で日なたはすこ～し暑いが日陰はヒンヤリといったまさに絶好の行楽日和に、クマさんのフィールド ドイツトウヒの森のなかで行われました。

ワラビは少し早かったようですが、ゼンマイ、ウド、こごみ、ニリンソウ、変わったところでは山ぶどうの若葉など、予想以上の収穫があり、お昼にはそれらを天ぷらにして美味しくいただくことができました。

山菜を採った場で食す、という当初の目的？もかないましたがそれにもまして講師クマさんの林業の歴史と現状、また今後についての解説に「目からウロコ」の方も多かったのでは、と思います。

さて、これからもま～ゆ寺子屋にどうぞご期待ください。多くの皆さんのご参加お待ちしてまーす。

ま～ゆ寺子屋担当　のび太

3 トク自然教室に参加して

ま～ゆ寺子屋担当 №33 Aya こと 我 孫 子 文 子

ま～ゆ会員になって始めて会報に文章を載せて頂くことになった Aya です。以前ものび太さんと学習係りを仰せつかって数回企画しましたが、お互いに忙しくなり、ま～ゆ市にも出られない状況になりました。その後、信毎の記事にも載ったように自律神経失調症を患い、やっと正常な生活が出来るようになると、忙しい日々が続き、特に毎週末予定が入っていて、この日も参加できるか微妙でした。第一回の寺小屋に参加できなかったので、少々無理をして参加しましたが、行って本当に良かったと思える3トク自然教室でした。

集合場所でクマさんの説明と資料をもらって、いざ鼓滝の森林へ。でも歩き始める前にてんぷらの材料が取れないといけないと、クマさんが用意しておいてくれた椎茸の大きなこと。今までに見たこともない肉厚なもので、後でてんぷらにしてもらって食べましたが、忘れられない美味しさでした。

歩き出したら、色々な山野草、山菜、木々があり、クマさんや、ぶんちゃん、自然と親しむ会の会員でもあるミーすけさん、三井さん、宮坂さんなどに 20 種類ぐらいの名前を教えてもらいましたが、今覚えているのは 4，5 種類と情けない状況です。

クマさんにドイツトウヒの木の実が、ハト時計に使われていること、その実をリスが食べた後のものを見せてもらいましたが、見るからにエビフライの形をしていてびっくりでした。たらの木もあり、初めてたらの芽を採りました。ほかにもこごみ、ぜんまい、こしあぶらなど山菜の育っている姿を初めてみることが出来、また、空気も明らかに違ってマイナスイオンの中にいることを肌で感じられました。丸太橋を渡る事も久しぶりで、ワクワクしました。

お昼は、元の場所に戻って火を起こし、てんぷらの用意など、得意分野に分かれてま～ゆは人材豊富なことを実感した時でもありました。

美味しく食べた後は、後片付けをしっかりやって、丸太の椅子に座って、クマさんの講義を受けました。

林業の現状を話してもらいましたが、私が新聞やテレビ、ラジオなどマスコミから見聞きした情報と違ったことも多く、本当に3トク自然教室でした。最後に講師の熊さん、当日てんぷらの材料がないといけないと忙しい中、たらの芽、こしあぶらを採ってきてくださったぶんちゃんに感謝して、報告を終わります

人の輪築き自分発見

地域通貨「まーゆ」

「酒かす400グラムを100まーゆで」―。取引が成立すると、「ありがとう」と握手。=上田市下之郷のネットワーク縁舎

「仕事でも、親せきでもない、一生付き合える人たちとやっと出会えた」「初めての野菜作りで、自分の能力を発見することができた」

「蚕都（さんと）くらぶ まーゆ」（会員約百五十人）が十日、上田市下之郷の「ネットワークハウス縁舎」で開いた月例会。発足五周年を控えた意見発表で、集まった約三十人からは地域通貨「まーゆ」を通して築いた仲間の輪、初挑戦した農作業体験を「活動して良かったこと」に挙げる声が続いた。

「まーゆ」の特徴は、地域通貨を介したサービスや物の交換以上に、農作業体験やパーティーなど行事が多い点だ。田植えや大豆栽培から始めるみそ作りといった共同作業は、会員同士の交流を深めてきた。愛称で呼び合うルールも、肩書や年齢を離れた関係づくりに一役買っている。

「みんなが支え合う新しいコミュニティーが、どれだけ心を和ませてくれたことか」。十二年前に東京から故郷の上田市秋和に戻った中島邦夫さん(60)。Uターン後、自治会や同級生の集まりに参加しても得られなかったという居心地の良さを、ここで見つけた。

二年前に自律神経失調症を患った同市諏訪形の我孫子文子さん(47)は、会員の「たまり場」になっている同市秋和の前田光俊さん(64)、美枝子さん(59)夫妻の家で話すことが多い。前田さんが三年前にたたみ、今は「まーゆ」の活動に使っている元婦人衣料卸店の隣。

毎日誰かしら会員が足を運ぶ。我孫子さんは「気兼ねなく話せる仲間は、お金には換えられない」と話す。

「『まーゆ』が人と人の輪をつなぎ、いろんな可能性を引き出し、温かな関係を築き合う、そんな道具になってくれればうれしい」。上田市上田の代表世話人、安井啓子さん(56)は発足当初の会報に、そう記した。

行事や月例会に顔を出すのは四十―五十人。年代が四十―六十代に偏ってもいる。しかし人間関係の再構築や、新たなことに挑戦する中での「自分発見」は、成功しつつあるように見える。

会員の仲が深まるにつれ、まーゆの利用を省いて助け合う事例や、「悪いから」とお礼に現金を使うケースも増えてきた。「仲良くなれば地域通貨なんていらない」との声もある。一方で「まーゆが使える個人商店が増えて、地域内での循環が広がれば」といった夢を持つ会員もいる。個々が描く将来像は多様だ。

県のまとめだと、今年二月時点で、県内では十六種類の地域通貨が運営されている。白戸洋・松本大教授（地域開発）によると、同じ考えの人同士の狭い範囲でしか流通せず停滞するなどのケースもある。とはいえ「お金の役割を見直し、まちづくりの機運を高めるきっかけになった」と評価。「流通させることが目的ではなく、地域通貨を使って何を目指すかが重視される時代に入った」と指摘する。

「まーゆ」は七月、将来展望を語らう座談会も開く。「今まで通り『何でもあり』の精神で、『これをやってみたい』と手を挙げられる場があることが大事」と安井さん。さまざまな人が集まって起きる「化学反応」から、新たな展開が生まれることを期待している。

可能性引き出す「道具」めざし

「まーゆ」 上田市を中心とした住民グループ「蚕都くらぶ まーゆ」が2001年11月から運営する地域通貨の単位。地域通貨は、一定の区域やコミュニティーでサービスや物品のやりとりに通貨の代わりとして使われ、コミュニティーづくりや地域経済の活性化、NPO（民間非営利団体）活動の支援などを目指す。まーゆの場合は会員157人の間で利用でき、価値の目安は「1まーゆ=1円」だが、円に換金はできない。サービスや物品の「価格」はお互いの合意で決め、通帳に取引額や残高を記入。契約が成立した時には握手するのが決まりだ。

過去の記事から

「お知恵拝借　空き店舗活用」。上田市の前田光俊さんが壁に呼びかけ文を張った。

6月10日夜、市中央公民館。約130人が登録する地域通貨グループ「蚕都（さんと）くらぶ まーゆ」の市だ。地域通貨「まーゆ」を使い、お互いができるサービスを交換し合う。2年前の11月に発足して以降、月1回集まっている。

約30人の参加者を前に前田さんは説明した。「店をつぶすことにしました。地域に開放して、人が集まる拠点にしたい」。商売を支えてきた「カネの縁（えん）」からの決別宣言だった。

（2003年6月26日付「ずく出して、自治」第7部「地域再生の試み」の記事から抜粋）

みどりのバスツアー

柿其渓谷／牛ヶ滝

素晴らしい賞品の獲得

　初夏の緑を愛でるあなた任せのミステリーツアーは何故か(鋭い)カンが働いて"木曽路"の3文字がぐるぐる回りしてました。
車中での難問クイズもちょうどいい按配に反応して思いがけない高得点。素晴らしい(???)賞品がわがものと相成りました。
原始的思考もたまにはヒットです。
都々平さんには再三、緑を愛でてと言われましたがこの時期、緑の中にいることがあたりまえに感じている信州人はやはり、"食い、飲み、しゃべり"の三大原則が優先かも？
夕暮れ近く、狭い茶色の温泉にま～ゆ選りすぐりの"美女"10数人顔だけ出してるさまを想像ご覧あれ。
（決して口に出していってはなりませぬ。）

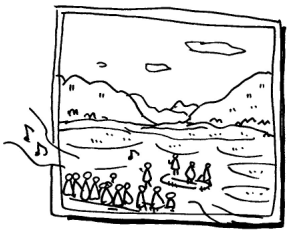
ハコ　記

奈良井宿

開田高原
／唐沢の滝

柿其渓谷／恋路橋

ホタルと歌うタベ



蛍コンサートに参加して

桜井 直枝

県政フォーラムで安井さんの地域通貨の発表を聞き始めてまーゆを知りました。大変興味があり、いつか参加してみたいと思い今回は2回目の参加です。

まーゆ通信の八ガキで蛍コンサートに参加したくなり、前田さんに場所を教えて頂きました。佐久から須川まーゆたんぼに向って車を走らせる事一時間、どんどん山道に入って行き、少し心配し始めた頃、賑やかな田んぼが見えて来ました。温い笑顔の女性三人が声を掛けてくれ、早速自然観察に同行させて頂く事になりました。ネジキ、クララ、ウメガサソウ等の珍しい須川の植物を教えて頂き、ありがとうございました。

ギター、アコーディオン、オルガンの音色が、山間の美しい棚田の中に響き渡り、夕暮れ時の光が差し込む幻想的な情景の中で、コンサートが始まりました。

いつもは歌わないのに、いつの間にか、生伴奏の心地良さと、懐しい唱歌に釣られて、大声で歌っていました。自然の中で歌う事が、こんなにも気持の良い物だとは思いませんでした。舌鼓みを打ちながら、手作りあめつを次々頂きながら、アットいう間に至福の時は過ぎ去り、儚かな ホタルの光に見送られ、帰路につきました。

まーゆの中広い年令層の素敵な笑顔の皆さんに、お逢い出来た事が、何よりも嬉しく思いました。皆さんのお力を借りながら、まーゆの事を理解していけたらと考えていますので、これからも、どうぞよろしくお願いします。

7月1日、空模様が心配されたホタルコンサートは、程よい涼風の中で地元須川の方々と歌を通した交流が行われました。

童謡・唱歌・フォークソング・懐メロと、ほぼ全員がステージに立って、美声を披露。　あっという間の2時間半でした。
ホタルの姿がちらほらだったのは 少し心残りでしたが。

5 月 28 日　須川で田植え

　私は、棚田を見るのが好きです。
水田は文化と環境を守るという 富山和子の日本の米カレンダー（12 枚の写真付）を購入して、飾ってあります。太古から、つい 40 年前ぐらいまでは、水田は文化でした。それが減反政策で、水田が荒れ始めました。私は少しでも棚田を残したいという想いでま～ゆの田植えに参加しました。
　ごんべえさんの指示で「苗は 2 本に、そのほうが よく分けつする」とのことで、そのとおりにしました。最初の田んぼは縄張りをしましたが、しだいに短くなり縄をまきました。集中力のない私は、「ああ、ホタルカズラが咲いているな、カワニナがいるな、蛍もだいじょうぶだな、セリがあるな。今は茹でて味噌漬けにするといいな」などと気持ちがすぐに、どこかに飛んでしまうのです。
　お昼は山菜やら、から揚げ、手作りパン等おごちそうをいただいて、おいしかったです。西さんに、タケノコまでいただきました。
　秋には重く垂れた稲穂を期待して、須川を後にしました。途中で雨が少し, 降ったけれども皆さん本当にご苦労さまでした。

76 番 ぶんちゃん

　ま～ゆ田んぼの田植えが予定より早く 11 時前には終わってしまい、やや欲求不満に思っていたところ、長大田んぼ助っ人の話が持ちあがり、どうしようかといつものように悩みながらも、結局、長大田んぼの手伝いに行った。長大田んぼでは私のような者でもベテランで、西ちゃんはアンジンさん以上の大先生だ。理由は、長大田んぼに来る学生達はいつも新人で、技術や経験の蓄積がまったくないからだ。参加した学生達は、いつかどこかでここで学んだことを思い出すのかな。
（№130 ヒデさん）

ことしもおこめのなえをうえることができました

今年も豊作になりますように、と車窓の木々を眺めながらミーすけさんに乗せて貰って現場へ直行。

とっくに着いたらしい人達も身支度も決まっていました。

しかしごんべえさんと私だけが“ナマ足„でした。

モグラが開けたらしい穴もあり誰かさんが泥を詰めていました。

お米の苗は今年は短いですね。

これより朝礼です。ごんべえさんから「2 本づつ植える、間隔は25cm 位」などとお話がありました。

めんどうな仕事ではなさそうなので安心です。

のどかな緑さし始めた山里に、ひときわ賑わいと華やかさがあり“懐かしい風景訪ねる旅„のようです。

長野大学の人達も少し向こうで植えていて、花が揺れているみたい。

えいっこして昔は作業をやったそうです。脇を流れるよう水路にカワニナがじっとしていました。1 ヶ月もすればここにホタルが舞うなんて夢のようです。

おっとお！ さあっと雲が張り出し雨です。皆用意万端、たちまち田んぼに色とりどりのカッパが並びました。

嬉しいねェ、一畝一畝微妙なライン山里に似合いそう。

越後も青田になっている事でしょう。

〝瑠璃色の地球ゥ♪〟と私は口ずさみながら周りの様子を眺めました。田んぼが苗で植わり次は

公民館で昼食です。20 品以上のおいしい物が机に並びました。

とても心のこもったごちそうに、笑い声も混じって幸せなひと時に

が然元気が出て夕ご飯のヒントが見つかりましたが

「できたらここで夕ご飯が食べたい」と思った私でした。

几帳面なま～ゆ人です。たちまち何事も無かったように片付きました。

毎日のように田の管理をしているごんべえさんとひろ坊さん、腰を伸ばしてください。

鹿の運動会もあることでしょう。地元の皆さんもこの田んぼを眺めて移り変わる景色を楽しんでくださることでしょう。

棚田がダムの役割も担いつつ、地球資源の保全

につながっている ま～ゆ田んぼでした。

おしまい。

№69 えーちゃん

七田チャイルドアカデミー上田教室 №11竹田

●体験レッスンの20%まで「ま～ゆ」をお使い下さい

上田市中之条101-1利幸第2ビル201号

TEL23-2952

私からあなたへ

車椅子すーいすい

No. 129

竹内　みさお

上田中央公民館で上田洋画会のグループ展をやっていました。六月三日の午後、私はMさんと二人で受付の当番をしていました。観客が一段落した頃、自動ドアから車椅子がすーいすいと入って来ました。隣の文化会館へ行く方かなと思っていると、直直に私達の展示ホールに向かって来るのです。彼女のにこにこ顔に私は「よく来て下さいました」と、つい旧知の友達のように声をかけました。

車椅子は壁に寄って題名や名前を見てからくるーっと弧を描いて後ろに下がり、正面から、暫く画を眺めていました。次の画も同じように一旦画に近付いてから、くるーっと後に下がって正面から画を見ています。一つ一つ丹念に見て下さっているので、受付に置いてある目録を持って行きました。

彼女の右手は、曲がった指に力を入れて車椅子のスイッチをしっかり押さえています。左手に紙を渡そうとしましたが、三本の指にバラバラに力が入っていて紙を持てそうにありません。車椅子の後ろに荷物を入れる網があったので、「ここへ入れておきますね」というと、彼女は全身を笑顔にして、たどたどしい云い方で、「あ、な、た、の画はどれ？」と聞きました。画を指さして受付に戻っていると、彼女は一枚一枚の画を近寄っては後に下がって時間をかけてじっくり見てくれているのです。ひとコーナーを見終わると、受付の私達の処へ車椅子を近付けて、「竹内みさおさんて、私知ってる」というではありませんか。「何で？」と聞くと『はながたみ』読みました」というのです。

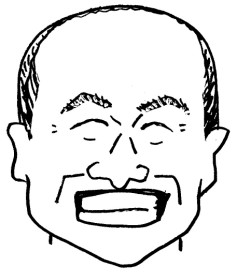
亡くなった御主人が糸車の会で活字を拾っていたのだそうです。だから一冊貰って読んだのだそうです。私が六十歳の時に作った自分史『花筐』は福祉工場へ印刷をお願いしたので、車椅子の方が作って下さっているとは聞いていました。それが彼女の御主人だったらしいのです。

「お逢いするのは、はじめてなんだけど」と体じゅうを動かして、たどたどしく話してくれます。四歳でお母さんを亡くして、おじいさんの膝の中で育ったのだとか、動けないご主人の身の廻りの面倒を見てきたというので、「大変だったのね」というと、面倒を見て上げる方でよかったとか、でも主人に逢えてよかったのだと云うのです。ロートレックが好き、青木繁が好きなどと種々な話をして、車椅子はすーっと自動ドアを出ていきました。

暫くすると、また車椅子が戻って来るではありませんか。「私の詩集」と云って小さな詩集を手渡してくれました。Mさんと、側に居たFさんにもくれました。『白い貝殻』という詩集でした。車椅子はすーいすーいと風のように緑の中へ消えて行きました。

私はスペシャリスト

文明の発達で人が人でなくなる



№35 昆ちゃんこと 清 水 卓 爾

昆ちゃんとは

昆ちゃんのニックネームは、小さい頃から昆虫を追いかけていたからです。いわゆる「MUSIYA」。ただし、自分の標本箱に同じ種類のチョウがいくらいても、なおも欲しがる、「蝶絶滅請負人」の収集家ではありません。私が山野でチョウを観察していた少年時代は、いま絶滅が心配されている、オオルリシジミ、オオヒョウモン、ヒョウモンモドキといったチョウも、あちこちで見ることができました。これらの「小さな生命」は、昭和30年代に始まった高度経済成長の大波に呑まれて、次々に姿を消しいきました。

人が人でなくなる

2年余前、信濃毎日新聞に、河合雅雄さんが現代の人間社会に対して次のように警告しています。「あらゆる生き物には生物進化の法則があって、進化してきた。１万年後もサルはサルでいくだろう。ただ、ヒトの場合このまま行くとヒトという生物であり続けるのかどうか、20年後さえわからなくなる。なぜなら、人間は自分で作り出した文化によって、生物進化のレールからおりてしまったからだ。反自然的存在になってしまったといえる」と書いています。

これまでの常識では理解できない、最近の様々な事件を考えると、河合さんの指摘が現実味を帯びてきます。

反自然人間急増の問題点

軒下にアシナガバチが巣をつくると、殺虫剤でシュー。ミミズを見てはキャーキャー大騒ぎ。こんな子どもの親が増えています。この様な親に育てられた子どもは…

.半自然人間よりも、文字どおりの「反自然人間」が増殖中です。

半自然人間は、定年になれば田畑を起こそう、里山の手人れもと考え実行しています。

ま～ゆのたんぼ、菜園で汗を流す会員も、自然派に回帰してきた人が多くいます。

国では大量に退職する団塊の世代に、農業の担い手に、荒廃する田畑の歯止めにと考えています。これらの世代は、潜在的自然派も多くいます。ある程度の「帰農」も期待できるでしょう。問題はこれから“主流“を占める、「反自然人間」です。食べ物は外国から。泥に汚れる農作業などはまっぴら。食料自給率が世界最低の40%。地球温暖化が進行する中で、食料輸人先のアメリカや中国などで気象異変が起きたら……。

虚空蔵山麓に自然、観察の基地

虚空蔵山麓に手作りのあずまやを造りました。一帯は、2月下旬から11月まで、チョウ80種類近くが見られます。約700平方メートルの荒廃した畑には、チョウの食草とチョウが訪れる草花。そして里山から消えつつあるユウスゲなどの植物を植えています。あずまやから標高差200メートル上の座摩神社までは、国蝶・オオムラサキが多く見られる地帯です。塩尻小学校、塩尻保育園から400メートル。小学校では2つの学年で総合学習に活用を始めました。保育園児の散歩コースに入れてもらう計画です。

自然観察の基地づくりの中心は、60歳代から70歳代でした。これからは、小中学生、保護者にも長期的に参加してもらい、手人れや観察、ときには鍋パーティーなどもと考えています。大人も楽しみながら、自然派を増やすのがコンセプトです。

場所は、上田市.上塩尻・新幹線のトンネルの入り口から200メートル東です。

お出掛けください。

ま～ゆな人

No.2 ごんべえこと中島邦夫さん

ゴンベーズ⇒GOMBEE⇒ごんべえ

ごんべえさんのニックネームは3代目にして定着(?)したことをご存知の方は少ないと思います。ゴンベーズについては「武蔵野合唱団で組んでいたクァルテットの名称」で、まさかこれが初代になるとは想像もつかなかったといいます。

GOMBEE は昨年別れた愛犬の名前で、これは 27 号で紹介されていますからそれをお読みください。

そして“ごんべえ”の登場です。

「百姓になりたい」と願っていたごんべえさんは、いかにもそれらしい名前を自分でかぶせて気取っていました。　須川に入って5年目にして傍から「やっと百姓の顔になったね」といわれて鼻を膨らませているごんべえさんです。

人生探しの旅立ち

食品メーカーの営業マンとして「楽しくて仕方ない」毎日を送っていたごんべえさんが 40 代の後半、都会人の持っている閉塞感に息の詰まる思いがして退職を決意、故郷に戻ってきました。

ところが地方も無気力で他力本願の空気に汚染されているのを目の当たりにしたごんべえさんは「上田で何かを」の思いが熱くなり「地域作りグループがあったら参加したい」と“人生探し„に足を踏み込んだのでした。

「農業に携わる仕事を」と思っていたごんべえさんが先ず見つけたのは“安全な農産物作り„を目指している農家でした。営業の経験を活かして、生産者と安全な食品を求めている消費者ニーズを結ぶ役割を担うべく共同で会社を設立し、5年後にはこの会社が軌道に乗ったのを見届けて離れましたが、農業への熱い思いはこの経験にとどまらず、須川の田んぼ再生へとつながっていくのです。

次の“人生探し”は今から6年前でした。「これまでと違った価値観の人生を歩むなら、きちっとした勉強をしていかなければ」と考えていた折、望月町(現在佐久市)で“宮本塾„が開かれていることを知って即参加。

ここでは、宮本先生の持論＝内発的発展(都市と農村の健全な交流の中から・農村が足元にある財産を活かして自立していくべき)に痛く共鳴しました。熱心な聴講生から実践者へ、ごんべえさんの活躍の場がま～ゆの設立に結びつき、さらに広がっているのはどなたもご存知のとおりです。

常に何かを追い求め、アンテナを張って“狙っていく„姿勢がごんべえさんのごんべえさんらしいところで、それは父親譲りの私欲のない働きだからこそ花を咲かせ実を結ぶのだと思います。

自然の中で自然流

ま～ゆを立ち上げるのとほぼ同時にごんべえさんは「自分たちで食べるものは自らの力で作りたい」と5年間の農業に携わった経験を発展させる方策を模索していました。有機栽培にこだわり、それに適した田を探していくうちに JA の林寛夫さんとめぐりあい、須川と出会いました。ホーおじさんとここに立って、荒れ果てた棚田を見たときに「なにかが呼んでいた！」と感じたそうです。須川の空気とアルプス連峰を遠望する景観にすっかり魅了された二人でした。

春の訪れを待って、理念を共有する仲間に米作りを提案したごんべえさんの“この指„に多くの会員が止まりました。が思わぬ困難が待っていました。一杯に張ってあった田の水が翌朝見に行くと抜けているのです。なんと犯人はモグラでした。穴を埋めて土手を修理して6月2日ようやく初の大イベント“田植え„にこぎつけました。

絶好の天気に恵まれ、総勢 20 名の賑やかな田植えは9時に開始して12時には無事に終了しました。いい汗をかいた後のおむすびは「ことのほか美味しかった」といいます。限りなく広がる夢に酔いしれて…。

もうひとつの夢、それは“雑草＝神草„という思想に基づいた農法です。赤峰勝人著～ニンジンから宇宙へ～を読んだごんべえさんは「目からうろこが落ちるとはこのことだ」と強い感銘を受けました。厄介者扱いされがちな雑草や害虫、菌は、実は作物をつくるのに大変貢献していること、化学肥料が非常に有害であり、「雑草に除草剤を撒いて殺してしまうなんて、とんでもない“雑草＝神草„です。」と訴える著者の考えにのめりこんで、自分もそれをやってみようと決意しました。しかし、実際には素人の自己流と見られて、須川の先輩も一緒に力を合わせてくれている仲間にも理解されなかったようでしたが、結果として収穫量に大きな影響はなかったといいます。

農業道の作法

自然流のごんべえさんは、地元の経験豊富なお年寄りや一緒に田んぼを管理している仲間の心配をよそに、「草が繁ったところでどうってことないでしょ？自然に任せておこうよ」とそ知らぬ顔でいました。しかし4年間やってみて草が機械に絡まるのはどうにも具合が悪く、今年からちょっと方針を変えてみたところ、草を刈り始めてみると「やめられない・止まらない、草が気になって仕方ない」気分になってしまったといいます。

「ようやく今年になってイライラしなくなった」とごく身近の仲間から言われてみて、「あのままで行ったらこのプロジェクトは続かなくなってしまったかもしれない」とも思い、自分でも分りにくいこの快感を考えてみて出た結論は“農業道の作法„でした。毎日せっせと草取りをしながら首をかしげる姿を想像してみてください。今日も「これは農耕民族の血(DNA)なんだろうなぁ」と自分を納得させているごんべえさんを…。

都々平 記

次号に続きます

わんちゃんにも【困ったときのにゃんこ先生】

6月29日の18時30分頃、会員№34のミミターンより電話が入りました。「犬のミミターンがケージにうずくまって動かないの。目がうつろで、鳴けないようだし、どうしたらいいだろう」と。

「お医者さんに電話してみたけど、5時過ぎは留守電になっていてどうしようもないの」と、もう泣きそうな声です。私には犬のことはわからない。「どうしよう？そうだ！かつて会員だった城下さんの犬猫病院がある」。電話をしてみましたが、やはり留守電になっていました。「にゃんこ先生でわかるかしら？」と思いながらワラにもすがる思いで電話してみました。「猫のことではなくって、犬なんだけど」と恐る恐る切り出しました。意外にも自信ありげに話を聞いてくれました。「いつからですか」「夕方小林さんが帰ったときは牛乳を少し飲んだらしいの」。動かずにうずくまっている様子を話しました。「１日、２日前からでなくて夕方から急に調子が悪くなったとしたら、慌てて医者にいくことないんじゃないかな、明日の朝行けばいいと思います。水も１日ぐらい飲まなくても大丈夫」。「えっ、そうなんですか」。「ひと様のことだから落ち着いて言えるのかも知れませんが…。でも、お医者さんに留守電のメッセージ入れて置いたらいいかも」。運がよければ返事をもらえるかもしれないとのことでした。

にゃんこ先生のアドバイスをミミターンに伝えました。もう彼女は心配で憔悴しきっていましたが、気休めに留守電にメッセージを入れたようでした。

次の日の10時頃ミミターンから電話がありました。「熱中症だったの」と。朝一番にお医者様に見てもらったそうです。手当てをしていただいて元気になり、ほっとした様子でした。

さすがにゃんこ先生です。お礼の電話を入れたとき、「私も熱中症を疑いましたが、室内犬がこれくらいの暑さではかからないだろうと思いました。大事に至らなくてよかったです」。と冷や汗をかいていました。

ミーすけ 記

街の気軽なマルチメディアショップ

㈲ 伸和印刷 №57 中澤

●ご利用金額の 10%まで「ま～ゆ」をお使いください

●今、流行りの自分史を作ってみませんか?

●会議資料作りに便利な、製本機能付き

高速デジタルコピー機導入しました

上田市国分１-７-12

TEL22-7710 Fax22-7718

都市・建築工房 №130ヒデさん(竹内秀夫)

●一級建築士事務所

●地元産木材を使ったローコスト環境住宅の設計料の５%まで「ま～ゆ」が使えます。

上田市御所274

TEL0268-28-7532

http://www6.ueda.ne.jp/~toshiken/

ま～ゆな人

No.68 大野 満里子さん

幼少の頃からいつも　“マリちゃん”と呼ばれていた。
東京の人・・縁もゆかりもない上田に移り住んで30年・・地方に来た訳は、ご主人の里司さんが、東京と、団地には住みたくない・・・ということで上田に移住、田舎ならどこでも良かった、という反面、もうすっかり上田の人になりきっている大野満里子さんに今回は登場していただきました。

～～満州で生まれ、育ち、小さい頃（学校では）は無口だったが近所ではガキ大将であった。終戦になってから、2年後に引き揚げたが、その当時に性格が変わったような気がするし、またそうしないと生きていけなかった(おしゃべりもになったし、積極的に人にもかかわるようにもなった)。
終戦後は、床の上にダンボールを敷いて勉強したり、いろいろなものを食べたりもした。
もちろん通学の途中で、日本人ということで石を投げられたり・・・・・
父が現地召集されなかったので、無事に引き揚げてこられたのだと思う。<母一人では３人の子供を連れて、引き揚げてはこられなかった>そのお陰で残留孤児にならなくて済んだ。残留孤児の人達には同情できるが、実際帰ってきてもたいへんだな～と思っている。

数年前ツアーで中国（大連）へ行ったけれど、自分が住んでいた場所へは行かれなかった。ツアーだと自分の行きたい所へはなかなかいかれない。
生まれたのは北満・・でも記憶がない。・・・・そんな経験をしてきたから、何処でも生きられる大陸型なのかも・・そして：：戦争はあってはならない：：ない方がやっぱりいいに決まっている。
と強調された。

それから～～～満里子さんのお父さんが「子供には手に職をつけよう」と考えていて、自分が思うとおりに子供たちを教育した。そのため、薬剤師の資格を取り上田へ来てからもお勤めしていた。
頑固な父ではあったが、。。。。。。。今は感謝している。。。。。。。。とのこと・・。

機会があって、中国語講座に入り、安井さんと知り合いそれがま～ゆへ入ったきっかけになった。（満州にいたのに中国語が話せなかった）

現在は“秋和菜園”と“お味噌作り”に参加している。手作り味噌は市販と違いとってもおいしいと・・・大喜び

現在住まいのある学海南では健康推進委員をこなし、月４回程度介護施設でボランティアをしている。これを始めたきっかけは満里子さんが、４人の親を充分には看られなかった・・・こんなことをしてあげれば・・・等・・思うことが多かった。
もうひとつは薬局にお勤めしていた頃、年配の方達から話しかけられ、話し相手になっていたが、そのおしゃべりをとっても楽しみにしてくれた。
お父さんが７１歳で亡くなったので、自分自身はその歳になるまで、やっておきたいことは、<済ませておきたい>。と思っている。！！残りはおまけの人生！！
年６～７回東京へ行く機会があるけれど、殆ど・・・日帰りで上田の方が落ち着くとか。。。。

ま～ゆにたいしては
５０代ならば率先して行動したが・・今は
呼びかけをしてくれれば、興味があるものには、参加したい。
昭和５０年に免許を取り、運転はしているが夜の運転が無理になってきた。
ま～ゆ市が昼間なら嬉しい。
できることは
・・話し相手・・

ま～ゆは本当に人材の宝箱ですね。タイヘンな時代のこともさりげなく話してくれた“まりこさん”でした。

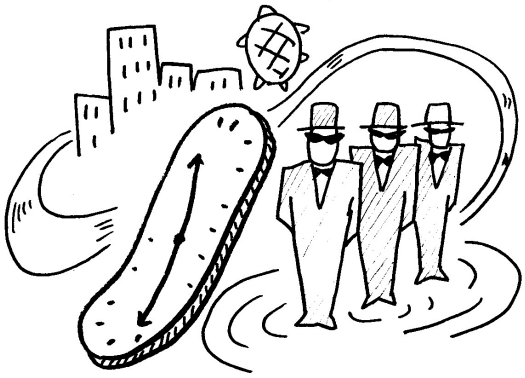
コボル 記

いま、改めて地域通貨を問う

№4 いじこと 黒田敏子

初めに私たちはま～ゆに「自分たちが新しい地域経済の循環形態を作るんだ」という期待感や意気込みをもっていた。それが全体の活性化に大きく寄与していたと思う。その背景には、エンデの言う、「お金は、循環しないと富として特定の場所に溜め込まれ、決して老化せず、そして何も生み出さない」「自然界に存在する物質は有限であり、寿命があるのに、お金だけはなぜ無限なのか」「お金を一部のものの独占にしてはならない」。また、ゲゼルは「お金は経済という有機組織を循環する血液のようなものだから、仕舞いには消え去るようにしなければならない」と主張。この様な考えかたのもと、国家が発行する通貨とは別の流通機構を作り出した、と思った。言わば、マネーゲームのような「人間の持つ強欲」を捨て去り、「物ことの交換システム」の構築だ。

しかしだ、



そういった前提の元にその後を考えるに、自れよ」という感じがしからお金を問うために、物のお金ではなく、「地中で流通させる」ことにぶ富の集積ではなく」、価値どおりの通貨で支たはずだったのだ。始めたはずのま～ゆの分の中では「あれよあてしょうがない。根源国家が発行している本域通貨を使用してそのより、「利子が利子を呼「物の価値に対して、払う」システムを作っ

ところが私たちは先ず、「顔と顔の見える関係を築くことが大切」という事に拘泥するあまり、いわば「環境づくり」に力を入れ過ぎて、その結果、自分たちは本当は「何をしたかったのか」を忘れてしまってないだろうか？

もちろん、顔の見える関係が「物こと交換」には大切なこととは思う。しかし主目的ではない。そういった中で、創始側の一人であった自分には、「盛り上げたい」という感情と、何か「違和感が残る」説明できない感情とが何時も交錯していた。そのようにして、もたもたと考えているうちに、始めのころに思い描いていた地域通貨像や流通形態が、はるかにかけ離れてしまったと思うようになった。

例えを出すと「異論が生ずる」のは承知だが、

須川の田んぼにしても、先ずはあそこの景観がすばらしく、遠くにはアルプスが望め、絶好の地にありながら、棚田が荒れていた。あの棚田が再生され、畦には様々な植物が咲き、おたまじゃくしやゲンゴロウ、そして究極にはほたるが飛び交う様を夫と共に思い浮かべていた。しかし現実にプロジェクトが動き出すと、収穫物の分配、草刈の回数の問題、農薬は必要だ、なんだかんだと当初の理想とは程遠くなってしまった。

「溜め込むお金に問題がある」のなら「農作業のやりかたや収穫物に対する執着」に問題はないのだろうか？そもそもま～ゆを始めた時の三原則（これについては敢えて書く必要があるのか問われたので、全ては書かないが）の内のひとつ「やりたい人が、やりたい時に、自分で責任をもってする」という事を改めて思うに、当事者はさぞつらかったただろうと推察する。日本の農業が定番どおり、ある意味、JA の指導どおりにやってきた結果が、

農薬の空中散布による昆虫や小動物の減少、コンクリートによる三面張りの直線的水路、圃場整備による規模拡大に対応する為に使用せざるを得なかった大型機械導入による借金、ブランド化による細く倒れやすい稲、等々の問題を抱えたと思う。

地域通貨で流通の革命を起こし、根源からお金を問う精神の元にはじめた棚田再生事業が、そのような反省点の多い日本の農業を一から同じようにやるなら、何故始めたのか意味がわからない。お米の流通のためなら個人でもやれるし、無農薬の良い米が欲しいから参加しているなら、そのような一般的農業形態にこだわる必要はあるのか？

それに、労力を提供したから収穫物を貰うのが当たり前、というのでは、アルバイトと同じではないのか？その**労力に見合った、他の機会に何かを提供してもらえるのが**ま～ゆのシステムだったはずだ。始めた人間がま~ゆで支払えば済む話だと思う。「**収穫が欲しいから参加することは悪いことではない**」というのは、悪いことではないが、ま～ゆのシステムでは当たり前のことではないと思う。それが物こと交換の精神ではないのか？

私の頭の中で何度も堂々巡りをした結果、この原稿を 3~4 回、一から書き直した。どうしても同じ疑問に突き当たってしまう。そこで、自分で決め付けた結論を書かずに、疑問の提示だけにしようと思う。紙面の都合もあり、尻切れのようになってしまうが、皆さんはこれを読んでどう思うのだろうか？

吉 崎 酒 店　No.126吉崎
●輸入元より直接仕入の厳選されたワイン
●和・洋酒各種・又健康に良いものいろいろ
●全商品５％まで「ま～ゆ」をお使い下さい
上田市中央3-7-7
TEL22-0300 Fax22-4525

甲田はきもの店　No.39 甲田
●ご利用金額の 10%まで「ま～ゆ」をお使い下さい
●靴、草履、下駄などの修理は20%まで使えます
上田市中央4-6-24
TEL22-1272

ま～ゆの皆様、お忙しい中、**引っ越しを手伝っていただいて**ほんとうにありがとうございました。

母と父の引っ越しなのですが、父がまた入院してしまい、今年 70 歳の母が連日荷造りをしながら不安でおろおろ、私もできるだけはやっているのですが、仕事は忙しいし、こどもは小さいし、母は車の運転ができないので父の病院とのやりとりもあるし…、そんな中、ま～ゆのみなさまに助けていただきました。

母も「お友達もいない新しい土地に引っ越してきたけど、ま～ゆの方々がいてこんなに心強いことはない、上田に来て本当によかった」と感謝しておりました。

こころの支えとか、安心して暮らせる人と人とのつながりとかっていうものは、お金では買えない、上田ならではの宝物、「これが上田の心意気」ってものですよね。

みなさまの心意気でま～ゆが維持されていることに、感謝、乾杯です。

さて、「懲りない」うちの父親（ふーてんおやじ）ですが、いつか新しい家にま～ゆの皆様をお招きしたいということだけが楽しみのようで、そのため ああでもないこうでもないと準備を頭の中で考えることで少し元気が出るみたいです。ぜひ皆様をご招待して五平餅パーティーをしたいと言っておりますので、その際はぜひお寄りください。

お礼まで　　No.32 古田睦美

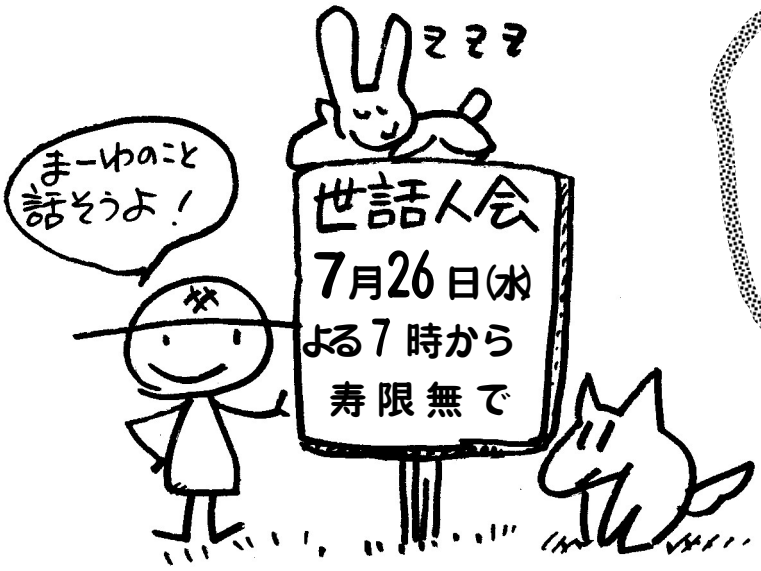
採れたてジャガイモと イガチクおやきの競演

（5日にジャガイモ掘をします）

詳しいことは
後日発表します。

ことしも！
じゃがパ～
8月6日（日）
in 須川

9月は縁舎で
ま～ゆ市
9月10日（日）
昼2時から



演題 沖縄を見ると日本が見える
～沖縄訪問報告会～
7月28日(金) 19:00～21:00 中央公民館

お金がマネーという怪物に化けて世の中を騒がせています。こんな時こそ“きれいで暖かい地域通貨”が浄化作用を発揮する好機ではないでしょうか。

今号では、ま～ゆ交換の実践例が投稿によって紹介され、先号に続いて“地域通貨ま～ゆ”の活動についてのご意見が寄せられています。

6月のま～ゆ市では“座談会”で思いのたけを話しきれなかった会員がいらっしゃったことでしょう。入会の動機はさまざまであり、ま～ゆへの関わり方もまたいろいろあって当然と思います。

いろいろな意見や要望を何かの形で出し合うことにより、ま～ゆは進化し、発展するはずですから、この会報もそういう場にもしたいものだと編集委員の一人として願う毎日です。

遠慮は禁物、どんどん原稿を送ってください。悲鳴を上げるくらいに…。

都々平

代表　安井啓子

ま～ゆ連絡先　前田光俊
〒386-0041
上田市秋和 503-6
TEL 27-1230

ホームページ　（検索エンジンで地域通貨 ま～ゆ を開いてください）